

『ハワーズ・エンド』に於ける「調和」

井 関 隆

I

Howards End は, “Only connect…” という epitaph を持つ小説である。¹⁾ 結びつける目的は, 「調和」を得て “the difficulties of life” (p. 70) を生きるためである。また「調和」の中にも依然残るであろう人間の個性の多様性によって “color in the daily gray” (p. 336) を楽しむためである。ここで敢えて「調和」と書いたのは, この小説の中で, この「調和」が “proportion”, “reconciliation”, “harmony” などの形で現われてくる上に, 現われる場所やこれを用いる人物によって, それも時期により同じ “proportion” でも少しずつ違った意味に用いられているからである。これは具体的に出てきた時点で説明するしかないであろう。ただ, 上で目的のところに書いた「調和」を読者が受取る時に二通りの道があることを言っておかねばならない。一つは, Alan Wilde のように “harmony” に近いものと受止めてこの作品では, 「調和」は達成されていないと見るものである。もう一つは “proportion” (かねあい) と解する道で, そうなれば当然「調和」は達成されたと見ることになる。我々はこの解釈に立とうというのである。尤も我々も “ultimate harmony” はなお達成されていないと見るのだから結論にそう差はない。ただ我々は, Margaret Schlegel の成長に伴い, 「調和」に対する認識が深まり, 彼女の「かねあい」も, これで “begin” する妥協的なものから, 事態が瀬戸際に至った際にのみ採用する “as a last resource” としてのそれへ進んだと見るのである。

ところで Forster は, “The Paris Review” のインタビューで, この小説の “antithesis” に触れて, “True and lovable would be my

antithesis”と述べている²⁾。これは、*Howards End* の中では、“Truth”と“Love”に変わっているのであるが、“Truth”の方は Helen に、“Love”の方はマーガレットに概ね割りふられているように私には思われる。この小論では、上の観点から、この小説の二大 heroine であるヘレンとマーガレットの性格と行動を通じて調和の概念を見てゆきたい。

なお“connect”する対象は、“prose”と“passion”のように概して対照的なものであるが、覚えて忘れない、過去の言動に責任を取るなど、過去と現在を結ぶといったものも含まれる。しかも、この2種類の「結びつき」は、共に個人の内部でのそれと、個人と個人のそれを含む。更に抽象概念同志のそれ(“the seen”と“the unseen”のように対照的なものだけだが)をも含むといった複雑さで、例を挙げるのは差控えることにする。

ただいくつかの限定が必要であろう。“connect”は“reconcile”とも、また“bridge”を掛けるとも言い換えられている。また語義の確定を要するものがある。“Truth”とは、個人的責任、義務、正義、倫理感といったものであり、“Love”は、“lovable”が転じたものであるだけに、これに免じて相手は無批判に許す、夫婦間の埋没的な愛で、濃厚に physical である。“tenderness”や“affection”や小文字の“love”も、それらが埋没的なものである限り“Love”である。この“Love”に対比されるのは、姉妹や友人間の“tenderness”、“love”、“affection”であり、またこの小説では実現されず予想されるだけだが“comradeship”が“Love”の最高の対立概念である。

II

ヘレンは、姉より8才若く Wilcox 家を訪問した時21才である。純粋で情熱的である。直情径行の人で、妥協することができない。彼女が好んで口にするのは、従って“reality”とか“absolute”である。³⁾ 姉と共に、“personal relationships”、“inner life”に重点を置く生活を送っている。ヘレンのこの小説に於ける役割は、Leonard Bast という下級事務員

の救済に熱中し、“Truth”の追及を自らに課してこれを押し進めることである。その過程で、ヘレンとは全く対照的な Henry Wilcox の“outer life”, “businessman” 的性格が明らかにされ、またマーガレットとの相違が浮き彫りにされる。

以上は、ヘレンの性格の概要であるが、プロットに添ってより具体的に彼女の性格、そして、彼女の“Truth”追求の経過を見てゆきたい。ヘレンは、ドイツ旅行で知り合ったウィルコックス家の人々に招かれて、Hertfordshire にある古い屋敷ハワーズ・エンドに滞在し、その家族全員に好意を持つ。ヘンリーは、長男 Charles と共に London でゴムの会社を営んでいる。ヘレンは、次男の Paul と恋に陥る破目にもなる。ヘレンが、この一家に魅惑されたのは、彼女自身の家庭が、弟の Tibby を含めても、極めて“feminine”なものであり、それと正反対の男性的で、有能な人々に新鮮な驚きを覚えたからである。⁴⁾

ヘレンとウィルコックス家の接触は、後に姉マーガレットとヘンリーが結婚し、ウィルコックス夫人 Ruth の所有するハワーズ・エンドを相続するというプロット上も重要な意味を持つが、接触の最初の影響は、彼等が“supreme”と信じて来た“personal relations”や“inner life”と対照的な“outer life”が存在することに気付いたことにある。

“The truth is that there is a great outer life that you and I have never touched—a life in which telegrams and anger count. Personal relations, that we think supreme, are not supreme there. There love means marriage settlements, death, death duties. So far I’m clear. But here’s my difficulty. This outer life, though obviously horrid, often seems the real one—there’s grit in it. It does breed character. Do personal relations lead to sloppiness in the end?” (p. 25)

ただ上のようにマーガレットが自分達の生き方に反省の気持を抱くのに対し、ヘレンは、ポールとの恋愛が一種の錯覚で、そうと解った時の彼の怯えた態度に失望した体験から、元の自分に立ち還るのである。“I know

that personal relations are the real life, for ever and ever.” (p. 25)

しかしながら、ヘレンのいう、“personal relations”は極めて観念的なものにすぎない。姉との関係を除けば、彼女はこれを持続できないからである。彼女には、“I’m going my own way” (p. 191)しかできないのであって、マーガレットと結婚する相手としてのヘンリーにも、弟のティビーにも妥協をしない以上これはむづかしいのである。マーガレットとのつながりをヘレンは、“You and I have built up something real, because it is purely spiritual.” (p. 192)と表わすが、二人の間は、精神的に結ばれた例外的関係なのである。

マーガレットには重要な意味を持つことになるルース・ウィルコックスも、ヘレンには、かすかな印象しか残さない。ヘレンは、ドイツにいてルースの死の知らせを聞くが、“a pleasant lady could now be pleasant no longer” (p. 102)と感ずるだけである。自身も女性的魅力に富み、肉体的情熱も持つことのできるヘレンは、衝動的にしか人を愛せず、レナードとのつながりも、またレナードへの忠告をめぐってできたヘンリーとのつながりも、“personal relationship”ではなく、観念的で、理詰めな、関係である。“responsibility”や“justice”という言葉がそこにはつきまとうのである。

ただ他者とのつながりがヘレンの中に於ける“responsibility”や“justice”或いは、“absolute”によって不可能になるということは、ヘレンの中でこれらの占める比重が高いということであり、個人の内部に於けるつながり、即ち内部の“connection”にはそれだけ優れているということの意味する。何故なら、過去を現在に結びつけること、例えば過去の行動に責任をとることもそれは含むからである。次に見るレナード・バストをめぐる“Truth”の追求は、ヘレンが、自身の責任を100%果たそうとし、それを自分同様の責任があると見えるヘンリーに押し広げてゆく過程である。

シュレーゲル家の人間と彼等より少し下の階級に属すレナードが最初に会うのは、音楽会に於てである。ヘレンがレナードの傘を間違えたことが

きっかけで、2年後再会してみると、彼等にはレナードが、ウィルコックス家の男達とは違った種類の“real man”に見え、興味をそそられる。レナードは、教養に憧れ、労働の合い間に教養の吸収に努めるが、どれも身につくに至っていない。しかし、本の内容を実地に体験すべく夜通し歩いてみたりするこの男が、姉妹には、想像力に富み、冒険家を目指す人間に思えるのである。誰かが手を貸せば、“real thing”に到達させてやれ、“life’s daily gray”から救い出してやることのできるのではないかという期待を姉妹に抱かせる。⁵⁾ 実際彼等の“debate”でレナードの救済をテーマにして議論に熱中するのである。⁶⁾ またバストを自宅に招いたパーティーで、同じく招待してあったヘンリーにマーガレットは次のように言う。

“His (Leonard’s) brain is filled with the husks of books, culture—horrible; we want him to wash out his brain and go to the real thing.” (p. 142)

このパーティーで姉妹は、ヘンリーに聞いていた情報、即ち彼の勤める保険会社が経営危機にあるという情報をレナードに伝える。警戒心の強いレナードは無視するが、後に、より低賃金の銀行に転じたという手紙をよこす。マーガレットとヘンリーの婚約が成立した後、この二人とヘレンが話す機会があり、レナードのことが話題になる。ヘンリーは、レナードがやめた保険会社が持ち直したと話し、ヘレンは「今まで金がなかった人間が、わたしたちのためにもっと金がなくなった……」ことに責任を感じ、ヘンリーを暗に非難する。⁷⁾ ところがヘンリーは、レナードのことを少しも覚えていないばかりか、ヘレンに向かって事業家らしい説教を始める。

“A word of advice. Don’t take up that sentimental attitude over the poor. See that she doesn’t, Margaret. The poor are poor, and one’s sorry for them, but there it is. As civilization moves forward, the shoe is bound to pinch in places, and it’s absurd to pretend that anyone is responsible personally. Neither you, nor I, nor my informant, nor the man who informed him, nor the directors of the Porphyron, are to blame

for this clerk's loss of salary. It's just the shoe pinching—no one can help it; and it might easily have been worse.” (p. 188)

怒りに身を震わせてヘレンは、ヘンリーを追求するが、ヘンリーは貧富の差は取り除けない、として、“you can't deny that, in spite of all, the tendency of civilization has on the whole been upward. (p. 188)”とヘレンを軽くあしらう。金持がこうして不平等は当然といった楽天的な文明論を口にするのに対して、その利己的な無責任な態度をヘレンは姉に向って非難する。注意すべきことは、マーガレットが、この時むしろヘンリーの肩を持ってヘレンをたしなめることである。レナードに転職を勧めた段階では姉妹は同一の態度をとったのであるが、ヘレンが“Truth”を追及する立場に立つ一方、マーガレットは、ヘンリーへの愛(“tenderness”の波が彼女をおおったとある)に傾くのである。

姉妹の“Truth”と“Love”に対する態度は、レナードが人員整理により解雇されるに及び、さらにかげ離れてくる。ヘレンは、自分が出席をボイコットしたヘンリーの娘 Evie の結婚披露宴にバスト夫妻を引き連れて乗り込む。2人は、突然飛び込んできたヘレンに、殆んど有無を言わず Oniton の村へ連れて来られたのである。ヘレンは、“Truth”の立場に立って、「正義」、「義務」などを持出してヘンリーの責任を問い、レナードを元の保険会社に復職させようとする。マーガレットは、彼女なりの“practicality”を発揮し、要するにバストに職を与えれば良いと割切って交渉を自分が引受ける。マーガレットもバストの窮状を救いたい気があるからである。しかし同時にマーガレットは、ヘレンの突飛な行動、場所をわきまえぬ振舞いを叱責する。無論新婦の父ヘンリーの立場を優先的に考慮するからである。次の通りである。

“I haven't nearly done with you, though, Helen. You have been most self-indulgent……” (p. 225)

そしてマーガレットは、ヘンリーの責任を問うことなく、レナードが何者かを伏せるという現実的なやり方で、自分の所で採用してもよいというヘンリーの内諾を得る。この時マーガレットが採ったのは、恋人のヘンリ

ーと真実を求めるヘレンの両方を尊重して実質的な成果を引出す方法である。このやり方が、いささかまやかしめいた妥協的なものであることは、マーガレットも意識しており、また、ヘンリーへの依頼が、“the methods of the harlem” (p. 227) に依ることも知っているのではあるが。

“How wide the gulf between Henry as he was and Henry as Helen thought he ought to be! And she herself—hovering as usual between the two, now accepting men as they are, now yearning with her sister for Truth. Love and Truth—their warfare seems eternal……” (p. 227)

しかしマーガレットは“Love”と“Truth”の間を行き来するというよりやはり“Love”に傾斜しているというべきであろう。なぜなら、上に引用した文章の続きに「あるがままの」男に概して味方したとあるからである。これは批判なく受容することに外ならない。

“On the whole she sided with men as they are. Henry would save the Bastis as he had saved Howards End, while Helen and her friends were discussing the ethics of salvation.” (p. 227)

さらに、マーガレットはヘンリーがレナードの妻を以前妾にしていた事実を知ると、ヘンリーの側に立ってレナード達を見限ることにし、独断でレナードを雇えないという手紙を書く。ヘンリーがこの手紙を姉に書かせたと信じ、また妾の件も敏感に察知したヘレンは、レナードに身を投げ出す。⁸⁾ヘレンはヘンリーが転職の件と妾の件で二重にレナードを苦しめ、しかも責任を感じないということで激高し、それがレナードへの同情に変わったのである。

ヘレンは、レナードを相手に、ウィルコックスのような“personal responsibility”を感じない人々、自身を“I”という個人で表わし、責任を明確にできない人々を軽蔑する。ヘレンの自己犠牲は、更に続く。ヘンリーが頼れないと知った時、自分の全財産の半分近くをバスト夫婦に贈るのである。またレナードの子を宿したと知って、大陸に渡り、元々は他人に

対する純粹な好意に発した一連の行為の結果に独りで耐えてゆこうとする。

レナードは、ヘレンの申し出にも拘らず、5,000ポンドの受取りを拒み、乞食同然の失業状態を続ける。彼は、自分の失業も、また妻がヘンリーの妾であったという事実も、誰も責めることなく甘受するのである。そればかりか、ヘレンとの一夜を、それがヘレンの方に原因があったとは少しも思わず、ひたすら自分を責め、告白のためハワーズ・エンドにマーガレットを尋ねて、チャールスによって死に至らしめられることになる。レナードは教養に憧れながらも、貧しい自分の環境に従順であることを余儀なくされ、惨めなままで死ぬのであるが、ティビーをして、“monumental”な所があると感動せしめた立派さがあるといわなければならない。

ひたすらバストのために“Truth”を追求してゆくヘレンの行為は、それ自体美しいものである。この小説に清々しさを与えているのは、ヘレンの無私な行動であろう。しかしながら、フォースターは、ヘレンの生き方にはむしろ批判的であるように思われる。ヘレンの行為は、現実的な見地からは、レナードを死なせチャールスを罪に追いやり、自らは父親のない子を産むというように少しも良い結果をもたらさないとと言えるからである。ヘレンが人間を対象に、完全なもの絶対なものを求めたからである。ヘレンの生き方は、美しいかもしれないが、憎しみにつながる。何故ならそれは一つの生き方を認めるだけで、他を排除するからである。1910年の『ハワーズ・エンド』と、1939年のよりペシミスティックな *Two Cheers for Democracy* を、それも一方は創作、一方は随筆であるものを同列に論じることは、余りに単純であるがこの単一性否定に関しては、それが許されるように思われる。たとえ“Truth”であろうが、単一のものだけに市民権を与えることは、“…all types are needed to make civilization”とするフォースターの採るところではないであろう。⁹⁾

最後の章でフォースターは、マーガレットの口を通して、多様性の重要なことを説く。それは、ヘレンが、レナードのことを忘れかけている自分を責めて泣くのを慰めての言葉である。

“It is only that people are far more different than is pretend-

ed… Don't fret yourself, Helen. Develop what you have ; love your child. I do not love children…Differences—eternal differences, planted by God in a single family, so that there may always be colour; sorrow perhaps, but colour in the daily gray……” (pp. 335-6)

ここで一家庭内の人間の多様性を皮切りにフォースターが説く、個人個人の多様性は、Bonnie Finkelstein も言うように、この小説での重要な鍵であるが、それだけでなく、フォースターの思想の中心的なものである¹⁰⁾。“What I believe”の中で“*No, I distrust Great Men. They produce a desert of uniformity around them and often a pool of blood too……*”¹¹⁾と言い、また有名な消極的民主主義弁護である“*So Two Cheers for Democracy: one because it admits variety and two because it permits criticism. Two Cheers are quite enough: there is no occasion to give three……*”¹²⁾を述べるのも皆、人間社会では多様性を認めるしかないという彼の考えを示すものである。

ヘレンの絶対を求める行動は上の“*What I believe*”で言えば“*Great*”にあたり、レナードを自らの手でではなくとも間接的に死に追いやってきた。『ハワーズ・エンド』に於てしばしば繰返される“*on this side of the grave*”では、ヘレンの生き方は承認されにくいのである。それでは「多様性」を以って無批判に誰でも許容するのであろうか。これを見るためには、ヘレンと違って他者との「結びつき」の可能なマーガレットがどのような場合に許し、多様性へと導くのかを調べてみなくてはならない。

III

次にマーガレットに於ける愛の認識の変遷について、また“*proportion*”に対する把握の進展についてマーガレットの性格を踏まえて少し詳しく見てゆくことにしたい。

フォースターは、まずマーガレットが、美しくも特に頭が良くもない代り、“*profound vivacity*”とでも言うべき特質があるとす。 “*vivacity*”

とは “a continual and sincere response to all that she encountered in her path through life” (p. 7) である。

ヘレンが一度興味を失なったウィルコックス家の人々に関心を持とうとしないのに対し、マーガレットは上記の性格ゆえに、ウィルコックス家的生き方にも絶えず真剣な反応をする。その結果として、自分達の生き方にも反省すべき点があることを悟り、成長してゆく。少しも “develop” しないヘレンが “flat character” であるのに対し、マーガレットは “round character” なのである¹³⁾。マーガレットには、“develop” するのに必要な心の広さ、謙虚さが与えられている。マーガレットが、初めて “proportion” を口にするのは、初対面のルースに向ってである。

“Life is very difficult and full of surprises…… To be humble and kind, to go straight ahead, to love people rather than pity them, to remember the submerged—well, one can’t do all these things at once, worse luck, because they’re so contradictory. It’s then that proportion comes in—to live by proportion. Don’t *begin* with proportion. Only prigs do that. Let proportion come in as a last resource, when the better things have failed, and a deadlock—gracious me, I’ve started preaching!” (p. 70)

マーガレットは、ルースと意気投合し、高揚した気分で上の言葉を啓示があった如く発したのである。従って、後に彼女自身が “deadlock” に乗り上げた時に採用する “as a last resource” という限定を付した “proportion” の重要性を、この段階でははっきりと認識していない。当分の間、マーガレットは、ここでの言葉と裏腹に “proportion” で “begin” してしまうのである。

この過程を具体的に見てゆく前に、マーガレットの生い立ちについて見しておきたい。マーガレットは、ドイツからイギリスに帰化した大学教師の父と、裕福なイギリス人の母との間に生まれた3人兄弟の長女である。弟ティビーを産んで母が亡くなった13才から主婦の役割を、5年後に父を失ってからは、家長の役割を果して来ている。ウィルコックス家の人々とド

イツ旅行で知り合った時は29才、弟ティビーは16才になっている。父親は物質主義に蝕まれた祖国よりイギリスで生きることを選んだ人間で、もし分類すれば “as the country man of Kant and Hegel, as the idealist, inclined to be dreamy, whose Imperialism was the Imperialism of the air” (p. 29) となるべき人物とされている。シュレーゲル家の3人は、こうした父の許で理想主義的で知的な人間に育ったのである。尤もティビーには父の影響は薄く、マーガレットは、“morbid idealist” ではないとされている¹⁴⁾。“dreamy” な idealist はヘレンに受け継がれたのである。また半分ドイツ人で父と母の親戚がそれぞれの祖国の優位を誇る中で育った彼等には、イギリスに対する愛、またイギリスの伝統美や自分の育った家に対する愛着が強く意識されていない。彼等は、“cosmopolitan”¹⁵⁾、Bradbury の言葉によれば、“deraciné”¹⁶⁾ なのである。一家の中ではマーガレットが、ルースによって眼を開かれ、ロンドンという都会の生活の慌しさ、自分の家への愛惜、イギリスの伝統美に気付き、ずっと遅れてヘレンが、ハーツ・エンドによってイギリスの美しさに目覚めるのである。マーガレットが Oniton で田舎の美しさにうたれ、そこに住居を定める気になった所を見ておこらう。

The loss of Wickham Place had taught her more than its possession. Howards End had repeated the lesson. She was determined to create new sanctities among these hills. (p. 219)

マーガレットは、言いにくいことでもはっきり言う性格である。それはやはり少女時代に根ざすもので、フォースターは、これを “a most offensive child” や “a hateful little girl” という言葉で表現している¹⁷⁾。

イギリスとドイツをめぐる議論で13才のマーガレットは、父親にその決着を促して “why will they not discuss this most clear question?” (p. 27) と言ったり, “To me one of two things is very clear : either God does not know his own mind about England and Germany, or else these do not know the mind of God” (pp. 27-8) という小憎らしさを見せ、一種の老熟を示すからである。彼女のたとえば

金銭に関しての率直な話しぶりは、ヘンリーのような上品を美德とする人間にはしばしばショックを与える。ヘンリーに収入を聞き自分のを言う時、また後に、ヘレンの妊娠がこの辺の地価を下げるのかとヘンリーに詰め寄る時などがそれである。

さらにマーガレットの特徴として、実際的なところを挙げておかねばならない。これは、彼女の家長的性格に帰せられるものであろう。従って、ヘレンと違って、自分達の金を実際に働くことで運用してくれ、自分達はその恩恵に浴している文明をつくり出した人間に、はっきりと美点を認めるようになってゆく。彼等のつくり出す美德が“neatness”とか、“decision”とか“obedience”のような「陳腐な」それであっても、マーガレットには軽蔑できないのである。マーガレットは、ヘレンに手紙で次のように忠告する。

“Don't brood too much on the superiority of the unseen to the seen. It's true,……our business is not contrast the two, but to reconcile them.” (p. 101)

この時の“reconcile”は、“connect”と同義だが、マーガレット自身にとっても観念的なものであって、“as a last resource”の限定を付けた“proportion”は、まだ遠い存在である。ウィルコックス的な美点を認めてティビーに対して仕事に就くようにと勧めるのが、“reconcile”の具体例であろう。Oxford 大学に在学のティビーに、マーガレットは、ホール・ウィルコックスがアフリカで金ではなく、「仕事のために」仕事に行っているのを引合いに出してヘレンに対するのと同じ趣旨の助言をするのである。ヘレン同様、ティビーも少しもこの助言に応えず、助言は何の実効も挙げない。

マーガレットは家をさがす必要に迫られて、無関心に近いヘレンとティビーに代り、一人でこの仕事にあたり、その過程でヘンリーの求婚を受けたのであるが、この結婚をヘレンに反対されヘンリーとの愛を客観的に考えてみる機会に恵まれる。3年近く好きではいたが、愛するようになったのは、求婚された時だというマーガレットにヘレンは危惧の念を抱く。

ヘレンは、“outer life” に生きるウィルコックス家の人間と自分達が余りに異質だと信ずるからである。率直に反対するヘレンに、マーガレットは二人の愛が “Yours was romance ; mine will be prose” (p. 171) と述べ、しかも冷静にヘンリーの短所を列挙する。そして、結婚相手に自分の全てを賭けるつもりのないことを言ってヘレンの同意を得る。¹⁸⁾

“……I don't intend him, or any woman, to be all my life—good heavens no!……” (p. 171) ヘレンの同意は、マーガレットに “proportion” を保つ能力を認めてのことである。ヘレンの言葉は、次のようなものである。

“You mean to keep proportion, and that's heroic, it's Greek, and I don't see why it shouldn't succeed with you. Go on and fight with him and help him……” (pp. 191-2)

婚約したマーガレットは、ヘンリーに対して、ヘレンに同意を求めた婚約前の言葉とは裏腹に、婚約者に一般的な愛情、即ち無批判な許しという意味で寛大な愛情を抱く。¹⁹⁾ マーガレットは、ヘンリーに手を貸して、自分達の中の “prose” と “passion” に “rainbow bridge” を掛けることができるかもしれないと期待する。²⁰⁾ ヘンリーは、しかし、自分の内部に眼を向けるような精神性を持たず、マーガレットは、ただ自分の方が譲歩してヘンリーの “soul” が鎮まるのを愛によって助けるという控え目な役割に甘んじる。人間関係にも仕事に対するのと同じ取扱いをするヘンリーには、マーガレットが「内的に」助けてくれることなど無用なのである。しかしマーガレットは何度でも努力して、ヘンリーとの間に「橋を掛け」ようとする。²¹⁾

ヘンリーへの愛により、ヘンリーに「橋を掛け」る作業もせずに自ら引下がってしまうこともある。それは、走っている車からマーガレットが飛び降りた件の処理のことである。イーヴィーの結婚式でオニトンに行った際に、自分の乗った車が一少女の猫を轢く。轢いた本人ではなく、代りの者を確認にやり、後は保険会社が処理するとして車をスタートさせたチャールズにマーガレットは車を止めるように言い、無視されると飛び降り負

傷する。持主の少女に謝るのに代理ですますチャールスや同乗者にその傲慢さを気付かせることもしない。のみならずチャールスが自分のことを興奮して云々とヘンリーにチャールス流の解釈で報告をしても敢えて見過す。イーヴィーの結婚式に支障を来たさぬためにである。負傷を辞さず飛び降りる行為は、“Truth”の発露である。自分の真意を誤解されるままに放置し、ヘンリーに“Truth”の何たるかも説こうとしないのは、無論、ヘンリーへの愛情が基本である。この愛に免じて“Truth”の追求を控えたわけである。

マーガレットが、ヘンリーに妾がいた事実を知った後、ヘンリーを許すに至る過程に於ては、フォースターはヘンリーへの愛に加えて、マーガレットの楽天性と“pity”が作用したとする。ヘンリーの不義がルースに対する裏切りで、自分に対してではなかったのだから、またヘンリーを愛しているのだから許したいという気持と女としての自尊心の間でマーガレットは苦しむが、結局将来に希望を託して許すのである。

She told herself that Mrs Wilcox's wrong was her own. But she was not a barren theorist. As she undressed, her anger, her regard for the dead, her desire for a scene, all grew weak. Henry must have it as he liked, for she loved him, and some day she would use her love to make him a better man. (p. 240)

フォースターが“pity”と呼んでいるのは、母性本能のことであるが、次の文章で見る通り、批判なき許容をもたらすものである。“Truth”の追及はヘンリーへの“Love”により意識の外に押しやられている。

Pity was at the bottom of her actions all through this crisis. Pity, if one may generalize, is at the bottom of woman. When men like us, it is for our better qualities, and however tender their liking we dare not be unworthy of it, or they will quietly let us go. But unworthiness stimulates woman. It brings out her deeper nature, for good or for evil.

Here was the core of the question. Henry must be forgiven,

and made better by love; nothing else mattered. (p. 240)

マーガレットがヘンリーを許す決意をした後の心理を、フォースターは、“To her everything was in proportion now……” (p. 240) と書くが、自足し切ったマーガレットの“proportion”はここでは“harmony”に近いもののようである。しかし、ヘンリーに何ら反省を求めず、批判なしに早々と許したことは、僅かな期間を置いて、ヘレンのドイツ滞在への不安、そして8ヶ月の間を経て「あなたを甘やかした」というヘンリーへの怒りへと“proportion”を転じてしまうのである。この時の“proportion”は、決して“harmony”ではなく、これで“begin”してしまう、早手廻しのそれなのである。

一方ヘンリーは、マーガレットに許されるや否や、自分の砦に安全に籠ってしまって、間もなくもとの「有能」で「皮肉屋」で「親切な」ヘンリーに戻るのである。²³⁾ 彼は自分への愛情からマーガレットが注意深く砦を造るまで待ってくれたこと、マーガレットの内部で起った葛藤など想像もつかない。一切を告白して許された後は、忘れる作業に専念するだけである。彼には自分の過去と現在を結びつけること、即ち、この場合は倫理感覚が欠如している。「心の問題」も「投資上の失敗」と同列なのである。²³⁾ ヘンリーとの間に、たとえまだ“proportion”で「始める」といった段階であるとは言え“proportion”を見出そうとするマーガレットの期待に、ヘンリーは少しも応えない。いやそれに気付く能力もないのである。

この忘れる能力、即ち“connect”できない性質こそウィルコックス家のルースを除く人間の最も目立つ特徴である。これをめぐるエピソードは何度も繰り返されるが、典型的なのが、ルースの死を忘れるエピソードである。ルースが急病死した直後、ハーツエンドをマーガレット・シュレーゲルに譲るといふ遺言メモが見つかる。家族会議を開いた彼等は、病人の書いたものだからと無視することにし、これをルースの家族に対する裏切りとして、最愛の妻、最愛の母を悲しみの対象から一転して忘却の対象にしてしまう。自分達の気に入ってもいない田舎家も他人に譲られることになる。価値ある不動産ということになり、母親の遺志は精神的後継者を

求めてのものだったのだが、踏みにじって構わないと判断するのである。物質主義そのもので、またヘレンが非難したように世界を“common sense”に押しなべてしまう“businessman”の代表なのである。

これまで見てきたように、マーガレットはヘンリーを無批判に受け入れること即ち、ヘンリーへの排他的な愛によって“Truth”の立場に立つことを犠牲にしてきた。“Truth”の存在をヘンリーに気付かせることも控えてきた過度の配慮が、ヘンリーには却ってマイナスであり、ヘンリーとの間に「橋を掛ける」作業は徒労だったのである。しかも“proportion”がむしろこれで「始める」といった性格のものであることにはっきり目覚めていないのである。

しかしそのマーガレットが、ヘンリーへの“Love”を捨てて、“Truth”の立場に立つ決意をせざるを得なくなる。それは、まず、妊娠したヘレンを取扱うヘンリーの態度を通じてであり、次にハワーズ・エンドでの一泊を拒否するヘンリーの身勝手な無理解によってである。次に少し詳しく見てみたい。

オニトンを黙って去り、8ヶ月間ドイツに滞在しているヘレンが、本を取りに帰るとい手紙をよこす。この間にマーガレットはヘンリーと結婚する。病気を心配するマーガレットは、ヘンリーの策を容れ、本を置いているハワーズ・エンドにヘレンを来させ、待ち伏せする。それが妹への裏切りであることを意識し、後悔するが、結局実行し、ヘレンの妊娠を知る。マーガレットは、病人をだますのは差支えないというヘンリーの無礼さ、またスキャンダルを恐れる態度に、ヘレンを守る決心を固め、夫と医師に断固たる態度をとる。この時マーガレットはヘレンへの affection に基き、初めて“Truth”に傾斜した行動をするのだが、それは医師に対してであって、夫にではないとフォースターは付け加えている。この段階では夫に対しては、はっきりした批判を持たず、夫に“gentle”な気持を失わないのである。次がハワーズ・エンド宿泊の件である。

ヘレンが姉と共にイギリス最後の夜をここで過す考えを思い付いたのは、エーヴァリーの手でジュレーゲル家の家具や、本がすっかり配置されて、

もはや空家でなく「自分達の家」のように感じられたからである。エーザリーが使いの子に牛乳を持たせてよこし翌日も牛乳と卵を持ってくると言わせた不思議な行動もヒントになっている。二人は、家具から共通の思い出を触発され、マーガレットが夫に従って自分をだます手紙を書いたことへのヘレンの怒りも解け、和解する。

ヘレンの思い付きを実行するため、マーガレットは、ヘンリーの許可を求める。依然として「忠実な妻」であろうとし、また、実際家のヘンリーが無断で泊る場合に感ずるであろう気持に同情できるからである。この時のマーガレットは、やはり夫への愛を失っていないのである。

しかし、この後マーガレットはヘンリーとの間に決定的な距離があることに気付かされる。ヘレンを誘惑した男の名を聞きだそうとするヘンリーに取り合わず、マーガレットは、話題を宿泊の許可……1年も空家で、しかもヘンリーもチャールスも嫌っている家への……に絞って頼む。実際家のヘンリーには、何らかの実際的な意図のない宿泊の希望は不可解で、一泊が二泊になって住みつくのではなどと疑い許さない。重ねて頼むマーガレットにヘンリーは、子供達や死んだ愛する妻のことも考えなくてはならない旨の反対理由をあげる。この時のマーガレットの激高ぶりをフォースターは、“She was transfigured.” (p. 305) と書いている。マーガレットの言葉は、もはやヘンリーへの愛の遠慮を一切かなぐり捨てた激しいものである。

“You shall see the connection if it kills you, Henry! You have had a mistress— I forgave you. My sister has a lover — you drive her from the house. Do you see the connection? ……” (p. 305)

マーガレットにとって自分の過去を棚に上げてヘレンの情事だけを責め、スキャンダルになるのを避けるためにヘレンの宿泊を断わるヘンリーは、“Stupid, hypocritical, cruel—oh, contemptible!……” 以外の何者でもなくなったのである。²⁴⁾ 自分やルースが譲歩し、ヘンリーを“spoil”してきたこと、誰もヘンリーの頭が鈍いこと、それも“criminally”に鈍い

ことを言わなかったのだとマーガレットは決めつける。ヘンリーが答えるのは、あなたは脅迫をしているようだが、自分は脅迫には注意を払わないできたという意外な言葉である。

妻によって徹底的に断罪された時にヘンリーがとる防御は、またしても“obtuseness”の砦に籠ることではかない。ヘンリーには、マーガレットの言う「結びつき」の意味が全く理解できないのである。

マーガレットは、ここに至って漸くヘンリーへの無批判な愛のために曇っていた眼を開き、真実を直視し得たのである。彼女はいつかヘンリーに「結びつき」をわからせ、「虹の橋を掛ける」手助けができるという希望を抱いていたが、ヘンリーに対しては、それが幻想でしかないことを知ったわけで、遂にヘンリーに対する愛情が、無批判で、他人を排するものであった事実を認識したのである。マーガレットの中に眠っていた“Truth”への希求が、ここで一挙に溢れてたのである。

冷静になった後でも、マーガレットは、ヘンリーに向けた言葉が“perfect”で訂正を要さず、自分が謝る必要のないことを確認する。それを口にするのが必然性を持っていたことに彼女は気付くのである。“It had to be uttered once in a life, to adjust the lopsidedness of the world ……” (p. 329) またヘンリーがすぐに元通りのヘンリーになって内部の腐敗を平然と隠すだろうと冷やかな見通しを持つ。マーガレットは“*He had refused to connect, on the clearest issue that can be laid before man, and their love must take the consequences.*” (p. 329) として、ヘンリーへの愛が、“Truth”の前には挫折してもやむを得ないという客観的な立場に到達する。マーガレットは、ここではっきりとヘンリーより高い場所に立ったのである。それは、チャールスのことで話しがしたいと申し出たヘンリーに、ハローズ・エンドの鍵を返すところに象徴されている。彼女はヘンリーに向けて“*Here are your keys*”(p. 331) と言って鍵を投げるのである。

IV

ここでこの小説が終るならば二つの対照的な家族の戦争が一方の勝利で

終るといった単純で明解な解釈が成立つのだが、最後の第44章とその前の章の最後部のほんの数行とで小説は、意外な方向に急に転回し、両家の人間の多くを包摂して、一種の大団円を迎えることになるのである。

この終り方を検討するために簡単にその部分について見てみよう。

チャールスは過失致死罪で禁固3年の刑に服することになる。マーガレットの激しい攻撃の言葉にも落城しなかった“fortress”が、長男のスキヤンダルに崩れ去るのである。マーガレットが、“……I’m broken, I’m ended”(p. 331)と自分を頼るヘンリーに取った処置をフォースターは、次のように書いている。…He could bear no one but his wife, he shambled up to Margaret afterwards and asked her to do what she could with him. She did what seemed easiest— she took him down to recruit at Howards End. (p. 332)

44章は、1年以上経ったハワーズ・エンドが舞台である。ヘレンとその子も一緒にここに住んでおり、ヘンリーは病人同然になって、枯草病の体質であるのにこの牧草地のあるハワーズエンドに残っている。ヘレンは、成熟を見せていて、ヘンリーを嫌っておらず、自分の少女時代の男に対する絶対的な愛から脱して平和な状態に達したことを認識しており、また、自分達をハワーズ・エンドに落ち着かせ事実上の家長となっているのがマーガレットだと次のように言う。

“…Living here was your plan — I wanted you; he wanted you; and everyone said it was impossible, but you knew…… But you picked up the pieces, and made us a home……” (p. 336)

これに対しマーガレットは“tangle”を直しただけで、“things that I can’t phrase”が手助けしてくれたと、神秘的なものに動かされたことをほのめかす。ヘンリーは、家族会議を開いてハワーズ・エンドをチャールスにではなくマーガレットに、次いでヘレンの子に残すことを言い渡す。ヘンリーは、マーガレットが予想したように、元のヘンリーらしさを回復せず、このように遺産の決定を早々に行なう半病人の状態にあるようであ

る。

この決定を聞いたマーガレットは、不思議な気持になって沈黙する。

Margaret did not answer. There was something uncanny in her triumph. She, who had never expected to conquer anyone, had charged straight through these Wilcoxes and broken up their lives. (p. 339)

マーガレットに更に神秘的な感情を与えるのは、チャールスの妻 Dolly がルースの遺言が遂に実現したと口をすべらし、マーガレットへのハワーズ・エンドの遺贈が、早い時期にルースによりなされていたことを知った時である。

この章には、平和で楽天的な気分がある。²⁵⁾ マーガレットのヘンリーに対する愛は、“I like Henry because he does worry” (p. 34) という消極的なものではあるが、彼女は事実上の家長の役割に自足しているようである。ヘレンは、マーガレットが一家の危機を救ったことを賞賛し、ヘンリーも嫌いではなくなっている。乾し草の豊作を告げるヘレンの声には喜びがあふれている。ただ、ヘンリーは死を予感しているようであり、チャールスは2年の刑期を残しており、全く暗さがないわけではない。ただ、ヘレンの子には、父親レナードが果たせなかった教養の体得と十分な経済的基盤が約束されているように見える。

さてここでフォースターの意外な解決について考えてみよう。ワイルドは、プロットが、43章まで非常に“insistent”に出来ていて、それまでのプロットの要求に主人公が従わないのが不自然に見えるとする。マーガレットが、ヘンリーのところへ戻ることを、ヘンリーとは重要な関係が持てないことを悟っていること、ハワーズ・エンドへ定住して夫の許へ残ることが示されているが、これが信じ難いことなどを挙げて、最後の章が、それまでの過程と断絶していることを手厳しく衝いている。それまでもあった“optimism”と“pessimism”，“hope”と“belief”の矛盾がより明確に出ていることを指摘して、フォースターが、マーガレットを通して“proportion”ではなく“the half way meeting of opposites”

をなしたただけであるに過ぎないというのである。ワイルドの結論は、“The best criticism of the novel is Forster’s own: proportion must come at the end, not at the beginning, and Forster is not yet at the end of his search.” という辛らつなものである。²⁶⁾

最後の章が余りに短く、盛り沢山な説明が無造作に投げ込まれているのは確かである。またそれまでの plot が持つ慣性の方向とは違った方向に最後の章が向いたために、この作品の随所に見られる dualism 同様、フォースターは我々をいら立たせるのである。ハワーズ・エンドに於ける平和な状態をにわかに容認できない気がするの、まさにワイルドの言う通りである。

Lionel Trilling も、最後の章が “entirely happy picture” ではないとして、男が余りに “thoroughly gelded” で、ヘレンは男を、マーガレットは子供を愛せないでいるとしている。²⁷⁾

ここでワイルドの言った “proportion” について考えてみよう。最初 I で我々が簡単に触れたようにワイルドがこの語で考えているのは、“harmony” といったものであり、また “proportion in the last stage” を、フォースターのいう “ultimate harmony” と考えているのである。一方我々は、“proportion” で「始める」時にこれを妥協的な性格のものと捉え、“as a last resource” を付した “proportion” を一歩進んだものと捕えてきた。そして、我々は、次に見るように、マーガレットの最後の章に於けるハワーズ・エンド定住という解決こそは、“ultimate harmony” に至らぬまでも、単なる妥協から脱した “proportion as a last resource” に外ならないと見てよいのではないかと考えるのである。

このようにして見ると、ワイルドのと我々のとは、それほどかけ離れているわけではない。しかし我々は、ヘンリーへの愛の認識の変遷に伴い、マーガレットの “proportion” も、妥協的なものからより高い段階へ進んだと捕えようとするのである。ここでいささかくどいようだが、もう一度 III で迎ってきたマーガレットに於ける愛をふり返って見よう。

マーガレットは、ハワーズ・エンドを立去る決意をした時、身びいきな

無批判な愛 “Love” を脱していた。その結果マーガレットはヘンリーより上の立場に立つことになった。対等の立場ならヘレンのようにヘンリーに対する憎しみとなって完全な決別となったであろう。しかし、一度好意を持った相手を決して忘れることのない²⁸⁾マーガレットは、ヘンリーが、半病人になってしまったとき、保護者的立場から、「温かな気持になる」ことはなかったにしても、ハワーズ・エンドに連れて行くことをしたのである。フォースターは、それが “easiest way” だからしたとマーガレットに言わせている。マーガレットの実際的人格がそれを言わせてたとしてもよいかもしれない。ここでは “pity” と取るのは無理があるように思われる。マーガレットが上位に立ち、“pity” の条件は整っているが、この時は、ハワーズ・エンド定住は念頭になかったように思われるし、無批判に許す母性本能は、萎えていたように感じられるからである。

そして最後の章との間に1年以上の経過があったとされていることを忘れてはならない。ヘンリーの “obtuseness” の砦は崩れ去っており、しかもヘンリーは打撃から立ち直っていない。遺言の作成が彼の精神状態をよく示している。またマーガレットはヘンリーが「あのごたごた」の中で自分のしたことを “worry” しているから好きだと言っており、これは、ヘンリーが、自己批判まで行かなくとも少くとも悩むことで、自分の過去の行為を現在に「結びつけ」て考えていることであり、ヘンリーに他者との “connect” が生ずる可能性を示している。マーガレットは、こうした変化の芽生えを見て定住に踏切ったのであろう。“Love” から “Truth” に照らして批判を投げるまでに成長し、偶然という機会によるが、配偶者の危機が本物であった時、その非を確認した上で採用した方法は、“as a last resource” の付いた “proportion” といいよいのではないか。このように異質な人間をとり込んだ形での多様性の容認は、あるいは人間を相手の寛容は、フォースターの場合、無批判な許しではないのである。ヘレンの同居も、ヘレンの自省があって初めて可能だったのである。もちろん “ultimate harmony” が来ているというのではない。しかしヘレンの子供の中にその芽生えを見ようとするフォースターの希望を肯定して良い

ように思う。

“To what ultimate harmony we tend she (Margaret) did not know, but there seemed great chance that a child would be born into the world, to take the great chances of beauty and adventure that the world offers. (p. 327)

また以上の見地からすれば最後の第44章でのこの小説の急転回は、技法上の不備こそあれ作者の必然であったと弁護して良いのではなからうか。

〈注〉

- 1) 引用は, Oliver Starrybrass (ed.) *Abinger Edition Vol. 4.*, London, 1973. による。なお, 本文中の引用に於けるページ表示も全て同書による。
- 2) “The Paris Review” May 17, *Writers at Work*, New York, 1959, p. 27.
- 3) *HE*, p. 192, p. 314.
- 4) *HE*, p. 41. “I suppose that ours is a female house... I mean that it was irrevocably feminine, even in father’s time...”
- 5) *HE*, p. 142. この作品では, gray という語が頻出する。最も明瞭な意味を持つのは, p. 336 に於てである。このⅡの後半参照。
- 6) *HE*, p. 129. ヘンリーが debate をそれが頭の回転に役立つとして妙な賛意を示したのに対して, ヘレンが反発する。The aim of *their* debates, She (Helen) implied, was Truth. ヘンリーにとっては, それは頭の訓練に過ぎないのだが, ヘレンは, 後に, この机上の plan を実行するのである。
- 7) *HE*, p. 187. “... A man who had little money has less—that’s mine.”
- 8) レナードとヘレンの情事には, 疑問を持つ批評家が多い。Katherine Mansfield は, この作品を「一読して」(“had a look into it.”) 最も辛らつな評を述べた。それはヘレンの子がレナードから得られたか傘から得られたかわからないとして “All things considered, I think it must have been the umbrella.” というものである。 “Katherine Mansfield’s Journal,” May 1917, *E. M. Forster, The Critical Heritage*, London, 1973. p. 162. しかし, 二人の情事については, 出版者の Edward Arnold が既に draft の段階で疑問を出し, フォースターが, 1910年の9月13日付の手紙で疑問に賛意を表した上で改良に努力したが, plot に “inextricably” に組み込まれているので変更できぬ旨答えている。See *HE*. p. xiii. また1952年6月20日の “The Paris Review” のインタビューで, この情事が “realistic” なものでなく, “allegorical” なものだろうという記者の質問に同意して, マーガレットと読者の双方に驚きをもたらしたかったのだと述べ, またその為に多くを犠牲にしたと

- している。*Writers at Work*, *op. cit.*, p. 29.
- 9) "What I believe", *Two Cheers for Democracy*, London, 1951, p. 79.
- 10) *Forster's Women, Eternal Differences*, New York and London, 1975. p. 89. また A. Wilde も "connect" する目的を日常生活が無意味だから "wholeness" を求めるのだと述べている。A. Wilde., *op. cit.*, p. 107.
- 11) *Two Cheers for Democracy*, *op. cit.*, p. 82.
- 12) *Ibid.* p. 80.
- 13) E. M. Forster, *Aspects of the Novel*, London, 1927. 但し, ヘレンは, この小説の最後部で成長するので, 厳密な意味では flat ではない。
- 14) *HE*, p. 79.
- 15) *HE*, p. 99. "She's a cosmopolitan," said Charles...
- 16) "E. M. Forster's *Howards End*", M. Bradbury (ed.) *Forster : A Collection of Critical Essays*, Englewood Cliffs, New Jersey, 1966. p. 133.
- 17) *HE*, p. 28.
- 18) マーガレットとヘンリーの結婚も批評家の非難を浴びてきた。最も厳しいのは, F. R. Leavis であろう。"Nothing in the exhibition of Margaret's or Henry Wilcox's character makes the marriage credible or acceptable..." *The Common Pursuit*, London, 1952. p. 269. また A. Wilde のように, 結婚は認めても, 最後に, ヘンリーと共にハワーズ・エンドに帰るのを認められないとする批評家もいる。A. Wilde, *op. cit.*, p. 117. 確かに不自然な感じを免れ得ないが, フォースターの結婚観を肯定するならばこの作品に於けるいささか physical な面を欠いた散文的な結婚にも消極的賛成を与えることができるのではないか。即ち *The Longest Journey* に於ける Agnes と Rickie の physical な面に惹かれての結婚, *Where Angels Fear to Tread* での Lilia と Gino の同じく衝動的な physical 本位の結婚, *A Passage to India* で Mrs. Moore の口を通しての結婚に於ける physical な面の攻撃など, 或いは夫婦の社会に対する孤立性, 排他性の攻撃などを考慮すればということである。また『ハワーズ・エンド』では, 象徴的な面からマーガレットの愛が "comradeship" を目指したことを説いていることも弁護になろう。また "comradeship" まで来ると, フォースターの結婚観は, "Albergo Empedocle" の Mildred 攻撃を経て, homosexuality の要素を考慮しなくてはならなくなる。詳しくは別の機会に俟ちたい。
- 19) *HE*, p. 171. Thus she spoke before the wedding ceremony and the physical union, before the astonishing glass shade had fallen that interposes between married couples and the world.
- 20) *HE*, p. 183.

- 21) *HE*, p. 218. Disappointed a hundred times, she still hoped.
- 22) *HE*, p. 244.
- 23) *HE*, p. 244.
- 24) *HE*, p. 305.
- 25) Richard Martin, *The Love that Failed*, The Hague and Paris, 1974, p. 131. “the prevailing optimism” があるとしている。
- 26) Alan Wilde, *op. cit.*, p. 123. ワイルドが述べているように、この小説では “ultimate harmony” は確かにまだ未来に置かれている。それはどのようなものであろうか。我々が I の最後で触れたように、フォースターは “comradeship” 即ち、埋没的でない、性を超越した愛を究極の調和の中心に置いているようである。この “comradeship” の考察は、この小説の象徴的な面の研究と不可分であり、プロットの面に絞った本稿では対象から外した。今後の研究課題としたい。
- 27) Lionel Trilling, *E. M. Forster*, London, 1962, p. 116.
- 28) *HE*, p. 206.